私の工夫

子どもたちの学びを伝えるために

総社市立きよね認定こども園
保育教諭　大藤　裕恵

1　はじめに

本園は園児数約２００名、職員数約40名の幼保連携型認定こども園である。保育時間の異なる1号認定、2号・3号認定の園児が在籍している。園の取り組みを保護者に伝えることは日々思案しているが、毎日直接会うことが難しい保育部（2号・3号認定）の保護者には遊びを通した取り組みが伝わりにくい面がある。また幼稚部（1号認定）の保護者には口頭で毎日伝えられるものの、「遊んで」いることは分かっても、そこから何を学んでいるのかは不透明であるようだった。園の研究テーマである「夢中になって遊ぶ園児をめざして ～楽しいがいっぱいの自然環境を通して～」を目標に、保育を展開していく中で、その遊びの様子や園児の育ちが見えるようにするための取り組みを行った。

2　具体的な取り組み

①写真の掲示（ドキュメンテーション）

園での子どもたちの様子をイメージしやすいように、「夢中になって遊ぶ」姿を写真で定期的に掲示するようにした。写真と文字で表現するドキュメンテーション方式で、「何を学んでいるか」「どういう力につながるのか」ということが伝わるように心掛けた。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」と関連付けた表示を付け、子どもは遊びから様々なことを学んでいるということを知らせるツールとした。それを元に話をすることで、これまで以上に「様子が分かる」という声が返ってきた。またこの掲示物を作ることで、自分自身も保育を振り返ることにつながった。

ドキュメンテーション

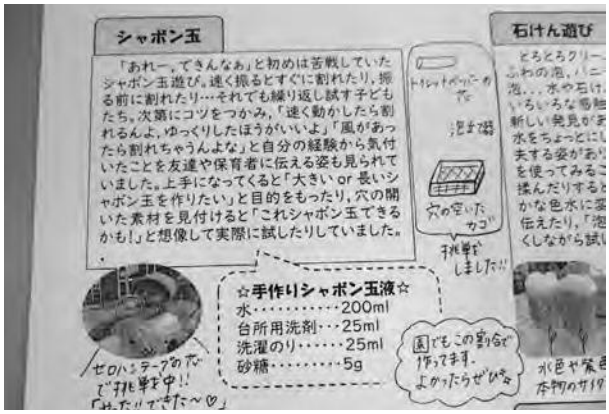
②素材の募集と報告

園児が遊びに使う素材を募集し、それがどのようなものになったか、園児の様子はどうだったかも知らせるようにした。製作コーナーで活用することはもちろん、虫かごにしたり、戸外でペットボトルをつなげてウォータースライダーをつくったりした。トイレットペーパーの芯やプラスチック素材の箱をシャボン玉の作成に使う園児もいた。写真で記録しておくと同時に、実際の場にそのまま残しておいて、送

ペットボトルのウォータースライダー

迎の際に親子で見てもらう機会を設けたりもした。保護者とのコミュニケーションを大切にし、持ってきた素材の具体的な使用例を見てもらうことで、園での活動に間接的に参加しているという意識をもってもらえるようにした。

③学年だよりの活用



学年だより

保護者にとって「読んでみよう」と思う学年だよりになるように、話題ごとに複数の写真を掲載した。遊びを通して感じたことや育っていることは園児の言葉に反映されているため、会話を中心に文章を構成するようにした。また、夏にはシャボン玉液の材料や作り方、冬にはゴム手袋や毛糸を使った氷づくりの方法を掲載したりして、家庭でも再現して遊ぶきっかとなるようにした。

3　成果

これらの取組を行ったことで、家庭で園の遊びがよく話題に上がり、「〇〇したよって言ったら、ママがこう言ってた」「今度お父さんと〇〇してみる」など、園での経験が親子の時間に影響を与えられていることが分かった。送迎時には「ここで今日ウォータースライダーつくったんよ」、「〇〇くんと一緒にここでいっぱいドングリ拾ったよ」などと伝える子どもと、それを興味深く聞く保護者の姿を見かけることも増えた。それは園児の意欲につながり、「また明日も〇〇したい」という思いで降園したり、「今日は〇〇するって友達と約束してる」と意欲的に登園したりする姿になったように思う。

築山を利用した水の滑り台

保護者からは「様子が分かりやすく、子どもが楽しんでいることが分かる」「家で話していることと具体的な様子が結びついた」「コロナ禍でも自然の中での遊びを工夫してくれてありがたい」という反応があった。戸外の自然環境を主として伝えたことで、送迎時に園児と会話をしながら通ることができ、より親子の共通の話題にしやすくなったようだった。

4　終わりに

園での育ちを家庭と共有することを目的とし、さらに園児の遊びが深まるように取り組んだ。保護者に園の遊びをこれまでよりも分かりやすく伝え理解が得られたことで、家庭でも話題になり園児の遊びの興味が持続し、夢中になって遊ぶ姿につながったように思う。保護者、保育者という身近な大人は園児にとって大きな環境である。その大人たちがつながることは、園児の育ちに大きな影響を与えると考える。互いに園児の理解者として手を取り合い、育ちを支えていくことができるように、今後も課題と向き合いながら尽力していきたい。